

『平家物語』濯頂卷前半部の形成過程

——結節点としての「女院出家」「大原入」——

野中 成淳

『平家物語』には、六代詩で終える断絶平家型と建礼門院譚で終える濯頂卷型の、大きく二種類の終わり方が存在するが、現在、発表者はとくに建礼門院譚を中心に『平家物語』の終結部の形成過程について研究している。

2024年8月の軍記・語り物研究会「大原御幸語の形成過程——その史実性の再検討も含めて——」において、史実の可能性が高いとされてきた大原御幸譚について、作為が随所に見られること、とくに大原という場所の設定は、『建礼門院右京大夫集』の影響による可能性が高いことを指摘した。

また、2025年には「安德帝入水記事の形成過程——覚一本の安德帝像の矛盾を糸口として——」という題目で、覚一本の安德帝像の矛盾の分析から、大原御幸譚（覚一本「大原御幸」「六道之沙汰」「女院死去」）が『平家物語』本編とは独立して成立したことを示す予定である（発表学会は未定）。

本発表はこれらの研究の一環として、壇浦合戦後、大原御幸譚までの建礼門院の動向（覚一本「女院出家」「大原入」）について、その形成過程を論じる。一連の記事の中心になる建礼門院の出家記事では、長楽寺の阿証坊印西が女院の戒師を務めたことが記されるが、これは史実では大原聖人湛豪とされる。この改変の背景には、『建礼門院右京大夫集』の影響が想定されるが、同様の影響は語り本系諸本の大原入記事にも見られる。一方で、読み本系諸本の大原入記事には、巻や章段を跨いだ重複が見られ、記事の編集の痕跡が存在する。ここから、大原入記事が壇浦合戦単と大原御幸譚とを繋ぐために整えられたこと、その際に影響を与えたのが『建礼門院右京大夫集』であることが明らかになる。

上記のような形成過程は『平家物語』諸本を対照させると、読み本系諸本の段階での流動が、語り本系諸本の段階で収束することがわかり、『建礼門院右京大夫集』他さまざまな典拠の影響を受けながら、それを一つの物語として収斂させる様が浮かび上がるのである。

『平家物語』灌頂卷前半部の形成過程

——結節点としての「女院出家」「大原入」——

京都大学大学院 野中成淳

一、はじめに

『平家物語』の終結部には、六代の処刑で終える「六代処刑型」と、建礼門院の往生で終える「女院往生型」とが存在する^{*1}。発表者は、とくに建礼門院譚の形成過程について研究しており、本発表はその一連の研究のうち、「女院出家」「大原入」に相当する箇所^{*2}の形成過程について検討する。

二、『平家物語』諸本の六代譚・建礼門院譚概観

『平家物語』終盤の六代譚・建礼門院譚については、諸本の間でも記事配列に違いが見られるが、章段レベルでその対応を示したのが、【表1】である。

紙幅の都合上、五本に代表させるが、それぞれの本の諸本分類上での位置づけは、四部本…読み本系・女院往生型／延慶本…読み本系・六代処刑型／盛衰記…読み本系・女院往生型／屋代本…語り本系・六代処刑型／覚一本…語り本系・女院往生型となっている。その上で、六代譚は渡瀬、灌頂卷前半部にあたる「女院出家」「大原入」は実綱、灌頂卷後半部にあたる「大原御幸」「六道之沙汰」「女院死去」は点線で囲み、それぞれの配列に異同を示した。

読み本系三本において、「女院出家」が①から④に渡っているが、それぞれ①は〈女院吉田入り〉、②は狭義の〈女院出家〉、③は〈女院の悲嘆〉、④は〈吉田在所の荒廃／女院隠遁を望む〉という内容になっている。語り本系ではこれらがひとまとめにされているが、読み本系諸本では、物語内の時系列に沿うかたちで断片的に入っている。また、女院往生型の伝本のうち、四部本と盛衰記については、「女院出家」「大原入」の記事に重複が存在する。灌頂卷前半部の記事の分布については、このように諸本ごとに大きな違いが見られるのに対して、灌頂卷後半部の三章段は、いずれの本を見ても三つでひとつのまとまりを構成していることがわかる。以下、この灌頂卷後半部を大原御幸譚と呼称するが、『平家物語』終盤の建礼門院譚については、灌頂卷前半部と大原御幸譚との間に位相差が存在することがわかる。

また、六代譚については、「六代」「泊瀬六代」についてはすべての伝本でひとまとまりであるいっぽう、六代処刑型の延慶本・屋代本では「六代被斬」が離れるが、これは「六代」「泊瀬六代」が文治元年（1185）の年末から翌文治二年（1186）の春にかけての話であるのに対して、「六代被斬」はそれより約15年後（覚一本では建久十年（1199）の頼朝死去よりも後）のこととされているためと考えられるだろう。そして、この二伝本は「泊瀬六代」と「六代被斬」の間に、文治二年（1186）の四月とされる大原御幸譚が入り込むことになる^{*3}。

*1『平家物語大事典』（東京書籍、2010年）他、先行研究では「断絶平家型」「灌頂卷型」と呼称されることが多いが、これらが厳密には語り本系の下位分類としての名称であり、本発表では読み本系諸本についても検討の対象に含むことから、終結部の主人公となる人物およびその最期の様子をもって「六代処刑型」「女院往生型」の呼称を用いる。

*2章段名は覚一本準拠。とくに断らないかぎり以下も同様である。

*3盛衰記は「六代被斬」が存在しない。この欠落を本来あったものの偶発的な脱落と見る場合は六代処刑型ということになるが、発表者は盛衰記卷四十八が四部本・長門本と同様に灌頂卷前半部の重複記事を持つことから、盛衰記作者が女院往生型を志向して六代処刑記事を削除したものと考えている。

【表1 『平家物語』諸本 六代譚・建礼門院譚配列】

四部本	延慶本	盛衰記	屋代本	寛一本
卷十一 先帝身投 能登殿最期 内侍所都入 女院出家① 女院出家② 卷十二 女院出家③ 女院出家④ 平大納言被流 大原入 六代 泊瀬六代 六代被斬 灌頂卷 女院出家(重) 大原入(重) 大原御幸 六道之沙汰 女院死去	第六本 先帝身投 能登殿最期 内侍所都入 女院出家① 女院出家② 女院出家③ 第六末 女院出家④ 平大納言被流 大原入 六代 泊瀬六代 六代被斬 女院死去 六道之沙汰 大原御幸	卷四十三 先帝身投 能登殿最期 卷四十四 内侍所都入 女院出家① 女院出家②③ 卷四十五 女院出家④ 卷四十六 平大納言被流 大原入 六代 泊瀬六代 六代被斬 卷四十七 女院出家(重) 大原入(重) 大原御幸 六道之沙汰 女院死去	卷十一 先帝身投 能登殿最期 内侍所都入 女院出家 卷十二 平大納言被流 大原入 六代 泊瀬六代 六代被斬 女院死去 六道之沙汰 大原御幸 六代被斬	卷十一 先帝身投 能登殿最期 内侍所都入 平大納言被流 卷十二 女院出家 大原入 大原御幸 六道之沙汰 女院死去 灌頂卷

※六代譚にも建礼門院譚にも属さない記事が入る箇所については空白とした。【表2】についても同様である。

ここまでの分析から導かれるのは、以下の三点となる。

- (1) 六代処刑型の配列は物語内の時系列に従っている。
- (2) 大原御幸譚はかなり早い段階からひとまとまりになっていた。
- (3) 灌頂巻前半部は、もともと物語内の時系列に従っていたが、大原御幸譚に吸い寄せられるように後ろへと移動した。四部本、盛衰記に見られる記事の重複は、この過渡期の痕跡であると考えられる。

灌頂巻に関する議論としては古く、灌頂巻が特立されたものか否かとする灌頂巻特立論争があったが、灌頂巻五章段をひとくくりにして考えるのではなく、灌頂巻前半部と大原御幸譚とで分けて形成過程を考える必要がある^{*4}。

*4 一連の論争については、渥美かをる「平家物語灌頂巻成立考」(「愛知県立女子大学愛知県立女子短期大学紀要」8号、1957年)の見解が概ね支持されて、灌頂巻は特立されたものとする見方が定着しているが、灌頂巻前半部と大原御幸譚の成立事情の位相差については本発表で初めて指摘したものである。

三、灌頂卷前半部の核と流動

【表 1】をもとに、灌頂卷前半部の内容をより詳細に示したものが【表 2】である。

【表 2】『平家物語』		諸本の灌頂卷前半部の配列	
四部本	延慶本	盛衰記	屋代本
卷十一 壇浦合戦譚 (1) 女院吉田入 (2) 女院出家 (3) 女院の嘆き 元暦大地震 吉田在所の荒廃 女院隠遁を望む 時忠配流 女院大原寂光院 女院吉田入(重) 女院の嘆き(重) 女院隠遁を望む(重) 女院大原寂光院(重) 寂光院の描写 天原御幸譚	第六本 壇浦合戦譚 (1) 女院吉田入 (2) 女院出家 (3) 女院の嘆き 女院隠遁を望む 元暦大地震 吉田在所の荒廃 時忠配流 女院大原寂光院 寂光院の描写 寂光院の寂寞 天原御幸譚 六代処刑	卷四十三 壇浦合戦譚 卷四十四 (1) 女院吉田入 (2) 女院出家 (3) 女院の嘆き 女院隠遁を望む 卷四十五 女院隠遁を望む 卷四十六 時忠配流 女院大原寂光院 寂光院の描写 寂光院の寂寞 天原御幸譚 卷四十八 (1) 女院吉田入(重) (2) 女院出家(重) (3) 女院の嘆き(重) (4) 吉田在所の荒廃 (5) 女院隠遁を望む (6) 女院大原寂光院(重) (7) 寂光院の描写 (8) 寂光院の寂寞 天原御幸譚	卷十一 壇浦合戦譚 (1) 女院吉田入 (2) 女院出家 (3) 女院の嘆き 女院隠遁を望む 女院大原寂光院 寂光院の描写 寂光院の寂寞 天原御幸譚 六代処刑 天原御幸譚 六代助命
卷十一 壇浦合戦譚 (1) 女院吉田入 (2) 女院出家 (3) 女院の嘆き 元暦大地震 吉田在所の荒廃 女院隠遁を望む 時忠配流 女院大原寂光院 女院吉田入(重) 女院の嘆き(重) 女院隠遁を望む(重) 女院大原寂光院(重) 寂光院の描写 天原御幸譚	第六本 壇浦合戦譚 (1) 女院吉田入 (2) 女院出家 (3) 女院の嘆き 女院隠遁を望む 元暦大地震 吉田在所の荒廃 時忠配流 女院大原寂光院 寂光院の描写 寂光院の寂寞 天原御幸譚 六代処刑	卷四十三 壇浦合戦譚 卷四十四 (1) 女院吉田入 (2) 女院出家 (3) 女院の嘆き 女院隠遁を望む 卷四十五 女院隠遁を望む 卷四十六 時忠配流 女院大原寂光院 寂光院の描写 寂光院の寂寞 天原御幸譚 卷四十八 (1) 女院吉田入(重) (2) 女院出家(重) (3) 女院の嘆き(重) (4) 吉田在所の荒廃 (5) 女院隠遁を望む (6) 女院大原寂光院(重) (7) 寂光院の描写 (8) 寂光院の寂寞 天原御幸譚	卷十一 壇浦合戦譚 (1) 女院吉田入 (2) 女院出家 (3) 女院の嘆き 女院隠遁を望む 女院大原寂光院 寂光院の描写 寂光院の寂寞 天原御幸譚 六代処刑 天原御幸譚 六代助命
卷十一 壇浦合戦譚 (1) 女院吉田入 (2) 女院出家 (3) 女院の嘆き 元暦大地震 吉田在所の荒廃 女院隠遁を望む 時忠配流 女院大原寂光院 女院吉田入(重) 女院の嘆き(重) 女院隠遁を望む(重) 女院大原寂光院(重) 寂光院の描写 天原御幸譚	第六本 壇浦合戦譚 (1) 女院吉田入 (2) 女院出家 (3) 女院の嘆き 女院隠遁を望む 元暦大地震 吉田在所の荒廃 時忠配流 女院大原寂光院 寂光院の描写 寂光院の寂寞 天原御幸譚 六代処刑	卷四十三 壇浦合戦譚 卷四十四 (1) 女院吉田入 (2) 女院出家 (3) 女院の嘆き 女院隠遁を望む 卷四十五 女院隠遁を望む 卷四十六 時忠配流 女院大原寂光院 寂光院の描写 寂光院の寂寞 天原御幸譚 卷四十八 (1) 女院吉田入(重) (2) 女院出家(重) (3) 女院の嘆き(重) (4) 吉田在所の荒廃 (5) 女院隠遁を望む (6) 女院大原寂光院(重) (7) 寂光院の描写 (8) 寂光院の寂寞 天原御幸譚	卷十一 壇浦合戦譚 (1) 女院吉田入 (2) 女院出家 (3) 女院の嘆き 女院隠遁を望む 女院大原寂光院 寂光院の描写 寂光院の寂寞 天原御幸譚 六代処刑 天原御幸譚 六代助命

これらのうち、(1)〈女院吉田入〉、(2)〈女院出家〉をはじめ、諸本にある程度共通する核が見られる箇所がある。たとえば(2)は、

・四部本（卷十一）

五月一日、建礼門院、御髪を下ろさせ給ふ。御戒の師には、長楽寺の印西上人とぞ聞こえし。

・延慶本（第六本）

五月一日、建礼門院は「憂世を厭ひ、菩提の道を尋ねるならばこの黒髪を付けてもなにかはせん」と思しめして、御髪下ろさせ給ふ。御戒の師には長楽寺の阿証房上人印西を参らせられける。

・盛衰記（卷四十四）

同じき八日、建礼門院、吉田の辺にて御飾り下ろさせ給ふ。御戒の師は長楽寺の阿証坊印西

上人とぞ聞こえし。

・屋代本（巻十一）

同じき五月一日、女院、御髪下ろさせ給ひけり。御戒の師には、長樂寺別当阿証上人印西ぞ参られける。

・覚一本（灌頂巻）

かくて女院は、文治元年五月一日、御髪下ろさせ給ひけり。御戒の師には、長樂寺の阿証房の上人印西とぞ聞こえし。

のように、文治元年五月初旬に、吉田で、長樂寺の印西を戒師として出家したという要素が共有されている。だが、同じ（2）でも、延慶本には源信『出家授戒作法』や『澄憲作文集』に依拠した独自記事が存在したり^{*5}、盛衰記に印西についての紹介が記されるなど、核を中心にしつつも記事の流動が見られる。

それに対して、核すらもはっきりしないのは（5）〈女院隠遁を望む〉で、延慶本・長門本は宗盛・重衡の処刑を耳にしたことが隠遁の理由になったとするが、それ以外の伝本は

この御住まひも、都なほ近くて、玉鉾の道行き人の人目も茂くて、露の御命、風を待たんほどは「憂きこと聞かぬ深き山の奥の奥へも入りなばや」とは思しけれども（覚一本灌頂巻）のように、特定の理由を明示せず、後者はさらに覚一本のように地震にともなう（4）〈吉田在所の荒廃〉を遠因としてほのめかすものと（4）を記さないものに細分化される。

全体の傾向として、読み本系諸本については記事の異同が全体的に多い傾向にあるが、語り本系諸本になると、六代処刑型と女院往生型の違いはあるものの、記事自体の異同はおおむね収束（終息）する。その中で覚一本は、（1）～（8）の随所で大原御幸譚と被る内容を削除している。

四、おわりに

一連の考察から、灌頂巻前半部は、断片的な核は持つものの、総じて、壇浦合戦譚までの『平家物語』本編と、大原御幸譚とを接続するための結節点として整備された箇所だと考えられる。

両者のより良い接続が模索された読み本系諸本の段階には異同や独自記事が目立つが、語り本系諸本の段階になるとおおむね異同は収束（終息）に向かい、覚一本の段階では、大原御幸譚を意識した記事の編集が行われて、本来あった接合痕が目立たなくされていることがうかがえる。

使用本文一覧

『平家物語』諸本については各本の積文を作成し、それを用いた。予稿及び発表資料で使用する積文の底本としたものは以下の通り（予稿で使用した本は下線で示す）。

・四部合戦状本（四部本）…『四部合戦状本平家物語』（慶應義塾大学付属研究所編校、汲古書院）／・大島本…〈天理図書館蔵〉大島本平家物語巻十二（翻刻）」（「ビブリア」79号）／・延慶本…『延慶本平家物語全注釈』（汲古書院）／・長門本…『長門本平家物語』（勉誠出版）／・源平盛衰記…『源平盛衰記』（三弥井書店）／・屋代本…『屋代本高野本対照平家物語』（新典社）／・三条西家本…前田育徳会尊経閣文庫蔵の原本／・鎌倉本…『鎌倉本平家物語』（汲古書院）／・覚一本…『新編日本古典文学全集 平家物語』（小学館）

本発表を含む一連の研究で使用する積文の全文は、対照表の形式で『古典遺産』第74号（古典遺産の会、2025年10月31日発行）に掲載する予定である。

*5 小林美和「『平家物語』の建礼門院説話—延慶本出家説話考—」（『伝承文学研究』24号、1980年6月）